

沼ノ上・飯塚裏・藤屋敷・中原・八幡木

—— 送電線増強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1 9 9 5

妻沼町教育委員会

序 文

妻沼町西部の永井太田地区は、県重要遺跡の飯塚遺跡をはじめとして弥生時代から奈良・平安時代にわたる集落遺跡や、江袋地域につくられた古墳群、あるいは道ヶ谷戸地区に広がる条理遺跡等の大変貴重な埋蔵文化財が古くから知られた地域であります。

この地区に存在する、電源開発株式会社の既存の鉄塔の増強工事が計画され、従来の約 2 倍の高さと 4 倍の面積を要する新しい鉄塔工事に先立ち、平成 3 年から 4 年にかけて本教育委員会では、電源開発株式会社の委託を受けて、当該工事予定地の遺跡の発掘調査を実施いたしました。

殊に、調査開始早々に記録的な長雨という悪条件にみまわれました為に、当初の予定期間を延期せざるを得ない調査となりましたが、多くの遺構や出土品を検出することができました。

本書は、この発掘調査の成果を整理し報告するものですが、私たちの郷土の歴史を知るうえでの資料とし、あるいは学術研究資料として有効に活用されるならば、幸いと存じます。

最後になりましたが、本調査の実施にあたり全面的に御支援いただきました電源開発株式会社只身幹線増強建設所、県文化財保護課、地元地区の皆様方に御指導、ご協力をいただきましたことに対して、深く御礼の意を表します。

妻沼町教育委員会教育長 長谷川 眞 一

例 言

1. 本書は、電源開発株式会社只身幹線増強工事建設所の既存送電線増強工事に伴う埼玉県大里郡妻沼町大字永井太田及び飯塚地区内の5ヶ所の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、電源開発株式会社からの委託により、妻沼町教育委員会が平成3年7月から平成4年3月までに実施した。
3. 調査組織は次のとおりである。

・発掘調査（平成3年度）

調査主体者	妻沼町教育委員会	教育長	長谷川眞一
事務局	〃	社会教育課長	赤石好康
	〃	社会教育課長補佐	西村良範
	〃	社会教育課主任	中里ゆかり
調査担当者		社会教育課主任	荒川 弘

・整理作業（平成6年度）

整理主体者	妻沼町教育委員会	教育長	長谷川眞一
事務局	〃	次長兼社会教育課長	橋本重忠
	〃	社会教育課長補佐	小林義一
	〃	派遣社会教育主事	田村哲夫
	〃	社会教育課主任	浅見幸子
担当者	〃	社会教育課主任	荒川 弘

4. 出土遺物は、妻沼町教育委員会で保管している。
5. 挿図の縮尺は遺物は3分の1、遺構は60分の1を原則とするが、図中のスケールを付ける。
6. 本書の出筆・編集・写真撮影は調査担当者が行い、遺物整理、作図等は、下記の者による。

岩崎明子・大須久美子・武沢理恵子・玉瀬静枝・飛田 博

目 次

序文

例言

目次

I	調査に至る経過	1
II	立地と歴史的環境	2
III	各遺跡の調査	5
	1 沼ノ上遺跡	6
	2 飯塚裏遺跡	8
	3 藤屋敷遺跡	16
	4 中原遺跡	19
	5 八幡木遺跡	20
IV	まとめ	23

I. 調査に至る経過

電源開発株式会社では、電力使用量の増加に対処すべく、県内及び隣接する群馬県内の既存鉄塔の見直しによる増強計画が立案され、既に昭和60年代前半に、町教育委員会に県文化財保護課を通じ、埋蔵文化財の所在と対応に付いて、申し出があり、電源開発、県文化財保護課及び町教育委員会三者による現地の現状視察がなされたが、その後の社会状況の変化に伴い、工事着工は南に隣接する熊谷市以南に止まった。

そして、平成2年になり妻沼以北の増強工事が平成4年から着工したいとの申し出により、当該鉄塔にたいする埋蔵文化財の有無に付いて、具体的な対応にせまられるようになった。町内に存在する鉄塔のうち、北側の3カ所を除く、鉄塔No.342・No.343・No.344・No.345・No.346・No.347 6カ所について事前に確認調査の必要があったが、No.343・No.344・No.345・No.346・No.347 の5カ所については、周知の埋蔵文化財包地で有ったが、No.342については、可能性があり、逆にNo.347は条理制内に位置するが、不明瞭で有りこの2カ所については事前の試掘調査が必要との見解により、平成2年度中に実施した。

その結果No.342の鉄塔部分では溝状の遺構を確認したが、No.347では特に遺構及び遺物の出土は無く、No.342・No.343・No.344・No.345・No.346の5カ所の発掘調査の必要性が生じる事になった。

これにより、電源開発株式会社只身幹線増強建設所では、妻沼町教育委員会と協議し、工事着工前に発掘調査を実施することとし、調査は町教育委員会が依頼された。

町教育委員会では、平成3年7月15日付けで、No.342・No.343部分の発掘調査委託契約を、ついで平成3年12月2日付けでNo.344・No.345・No.346部分の契約を締結し、発掘調査を実施したものである。

Ⅱ．立地と歴史的環境

当該する遺跡群は、妻沼町中心部の西側に位置し、大字永井太田地域に所在する地域であり、地目は畑を中心に一部水田の耕作が行われている。これらの地目構成は近年の土地改良事業により、従来の自然形成の様相から脱却した効率的な土地利用がなされているが、旧来の土地利用は、周辺地域が地質学上での表現である「妻沼低地」の呼称の如く、利根川やその支流によって形成された低地帯で有り、この河川により形成された、自然堤防とその後背湿地に区分され、前者はその微高地という特性により古くからの集落地帯や畑となり、後者は水田として利用されてきたものと推定される。

このことは、周知の埋蔵文化財包蔵地の分布状況で明らかな様に、概ねこれらは自然堤防上に大部分が該当する訳であるが、今回の調査地域もこうした自然堤防上に立地するものである。

次に、近隣の遺跡の状況を概観すると、先土器時代の遺跡は現在知られていない。縄文時代になると、西城の切通遺跡から、僅か1片のみであるが、前期の関山式が、熊谷市の寺東遺跡では諸磯式が検出されている。中期の遺跡ではやはりその数は現在も余り多くはないが、深谷市明戸東遺跡、町内では道ヶ谷戸条理遺跡から覆土中より加曽利E式の後半のものが知られている。後期になると前代に比べて著しく質、量ともに大きな変化が生じ深谷市本郷前東遺跡、明戸東遺跡では、称名寺式～堀之内式が、熊谷市寺東遺跡では称名寺式、加曽利B式が水田下から検出されている。町内では、道ヶ谷戸条理遺跡や飯塚南遺跡で加曽利B式～安行式の土器が検出されており、殊に寺東遺跡の如く、従来余り注目されていなかった、水田（所謂後背湿地の部分）の調査によって当該遺跡の存在が知られるようになった事から、今後周辺地域に於いてかなりの発見が予想されると言えよう。

弥生時代になると、県内というよりも東日本単位においても最も充実した地域と言えよう。これは、言うまでもなくこの地域が、弥生中期の須和田式の一連の再葬墓の濃密な分布地域で有り、深谷市の上敷免遺跡や妻沼町の飯塚遺跡に代表される著名な遺跡に加えて近年発見された、熊谷市の横間栗遺跡、妻沼町飯塚南遺跡、やや東方に位置するが、同じ立地地形にある行田市池上、小敷田遺跡に見られる如く弥生時代中期に入り、稲作生産の活動に適した、自然地形によるところが極めて大きな要因として、分布状況に大きく反映した顕れであろう。しかしながら次代の後期になると、その数が減少し、妻沼町弥藤吾新

田遺跡で弥生町式の住居跡が1軒、深谷市明戸東遺跡で吉ヶ谷戸式の住居跡が16軒検出されているにとどまり、他方周辺の丘陵部や台地上に分布の中心が移り、その背景は今後の課題として提議されている。

古墳時代の遺跡は広く分布している。集落遺跡では、弥藤吾新田遺跡から五領期～和泉期の住居跡が12軒検出されている。五領期の住居跡は他に上江袋遺跡、鶴ノ森遺跡で各々1軒検出されている。町内の五領期の甕形土器の主体を占めるのは石田川系のS字状口縁の台付甕で、利根川を挟んでの広域圏が想定される一連の資料である。

後期になると、その数が飛躍的に増大する。町内に限定しても道ヶ谷戸遺跡、飯塚南遺跡、鶴ノ森遺跡、妻沼小校庭遺跡、弥藤吾氷川遺跡等の既存の調査や、散布状況等からも急激な増加傾向が顕著に伺うことができる。

次に、古墳についてみると埴輪の出土する地域はかなり多くの地点が知られているが墳丘の残っているものは極めて稀で有り、現在唯一認められるのは、摩多利神社のみであるが、形態的にやや問題も有り明確なものではない。過去の調査例では、上江袋遺跡で古墳跡が調査され、鶴ノ森遺跡でも古墳跡が検出されている。また弥藤吾の王子古墳では、すでに破壊を受けていたが、角閃石安山岩による横穴式石室が存在したと考えられている。しかしながら、江袋地区や西城地区等では耕作中に多くの埴輪がかつて出土した事例が多く伝わり、本来相当数の古墳が存在していた事は明らかであり、その大部分のものが削平され現存しない状況下にある事を物語っていると言えよう。

奈良時代以降平安時代にかけての傾向は、前代の古墳時代集落と極めて類似した分布傾向を示し、先に示したほとんどの遺跡に於いて、複合遺跡として長期にわたる集落形成を続けていたと考えられる。

この時代の特殊な遺跡として、注目されるものは妻沼小の校庭整地作業中に発見された妻沼（大我井）経塚遺跡であろう。墨書の「久安年号」の銘文により平安末期に於いて、経塚を埋設する仏教思想を早くから取り入れた集団の存在が想定され周辺の開拓がいち早く行われ、道ヶ谷戸条理遺跡や隣接する別府条理等、技術と生産力は当該地域の地理的要件を十分に活用した、広大な生産基盤としての農地を作りだしていった地域であったと推測される。

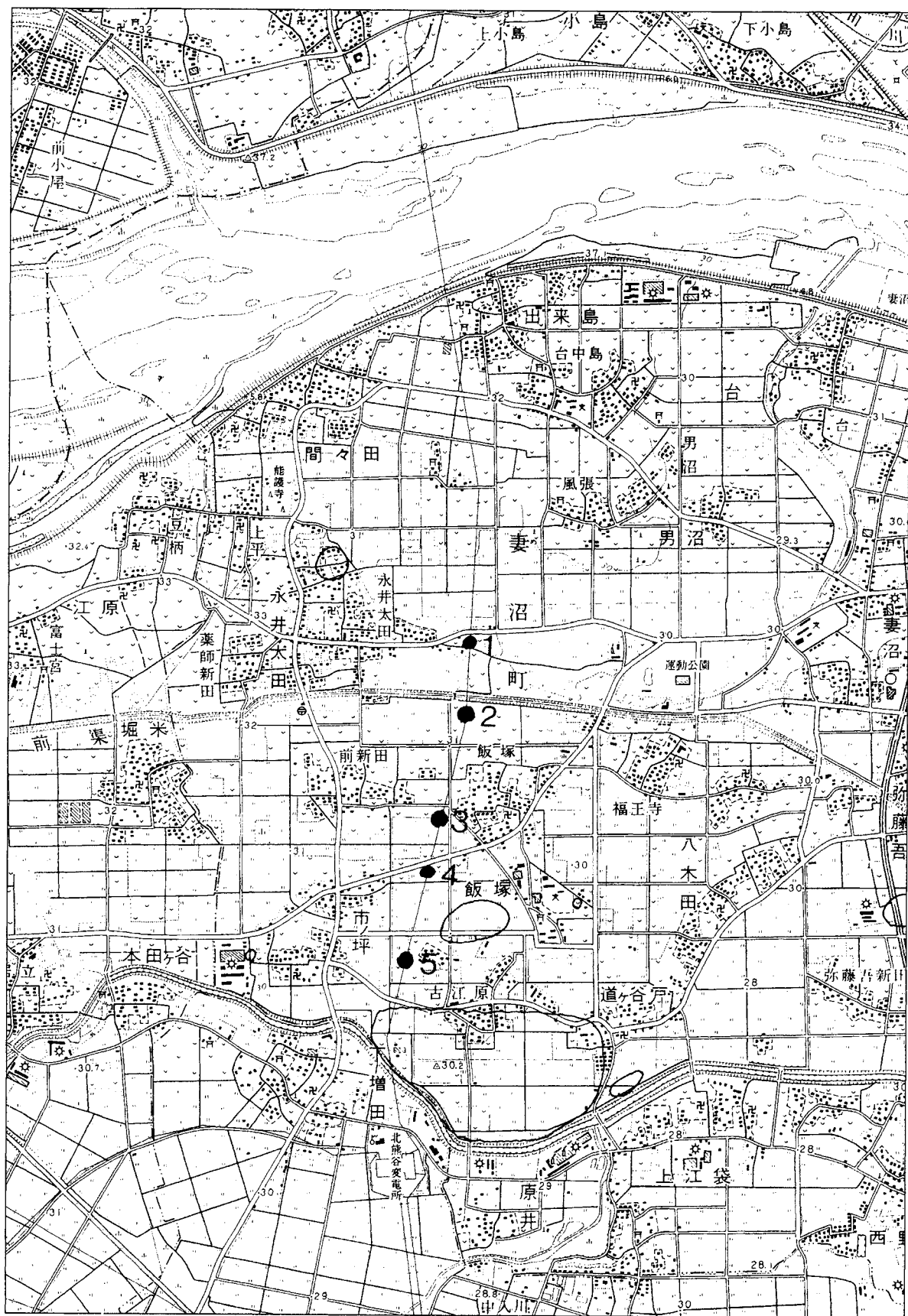


図 1 周辺遺跡

Ⅲ. 各遺跡の調査

1 沼ノ上遺跡

妻沼町大字永井太田字沼ノ上1647－4外

遺跡の概要

本遺跡は、2年度の試掘調査によって確認されたもので、既設鉄塔の西・北・東側部分の三面を調査した。大部分は畑として利用され、一部東側が削平され水田であったが、特に北面部分は大量の砂の堆積が確認されており、字名の「沼ノ上」の呼称の如く、北側はかつて沼地であった可能性が考えられる。

検出遺構

検出された遺構は、東西方向に走る溝跡遺構のみであった。この溝は試掘調査で確認されたもので、西側面では幅1.2m～東の鉄塔下で1.4mの東西方向へ走るもので、ほぼ同方向に浅い2条の小溝が接して、東は鉄塔下に入り全容は明らかではなく、鉄塔建設時に壊されたものである。鉄塔の東側部分に付いては、溝の延長する遺構は確認されず、丁度鉄塔下でL字状に屈曲するコーナー部の可能性が考えられる。

溝中よりの、出土遺物は検出されていないが、土層面に天明の火山灰層が明確に残存しており、この遺構の構築年代は中世ないし近世の範疇と考えられる。位置的な状況から全容が明らかでなくその性格的位置づけは不明である。

出土遺物

調査区からは、表土及び覆土中より若干の土師器の小片を採取したが、いずれも図示するに耐えられないもので有り、また当該地の東、南部分の畑中に同様の小片が散見する事を考えると、同期の集落が存在する可能性は極めて高いと思われる。

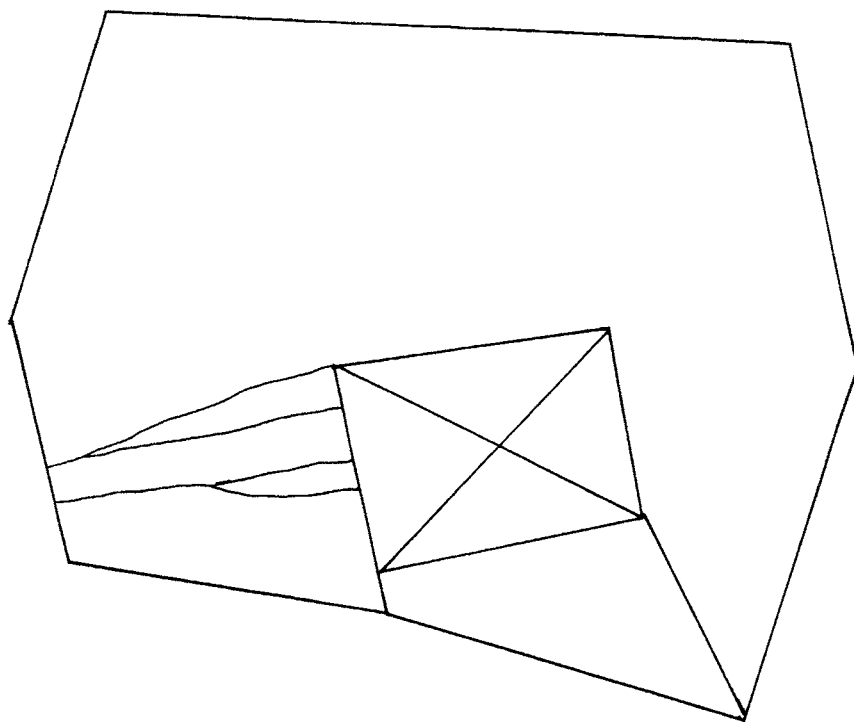


図 2 沼ノ上遺跡全測図

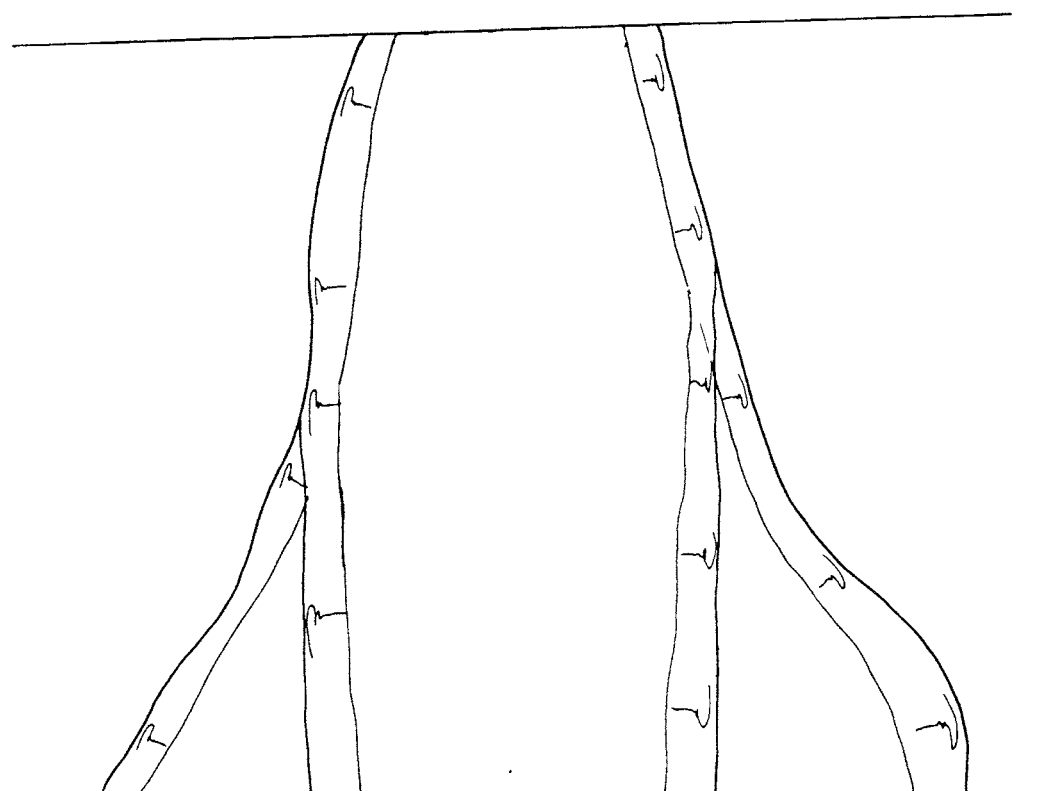


図 3 溝状遺構

2 飯塚裏遺跡

妻沼町大字永井太田字飯塚裏93－2外

遺跡の概要

県重要遺跡の飯塚遺跡の西北部分に位置し、野菜畑として利用されており、今回の5遺跡のうち最も保存も良く、遺構、遺物に於いても良好な状況であった。既設鉄塔の東・北・西三面が調査対象となった。限られた調査区でありながら、非常に高い密度で遺構が確認されており、広範囲に広がる奈良時代から平安時代にわたる大規模な集落遺跡の可能性が高い。

検出遺構

検出された遺構は、住居跡5軒、溝1条、火葬墓1基、土壇4基で、最も多くの遺構が確認された遺跡である。

住居跡5軒のうち全体を確認したもの1号住居跡、ほぼ全掘したものが3号住居跡、他の3軒は、各々約2分の1を確認したのみである。これは、2号住居跡は東半分が鉄塔下に位置し、4号住居跡は東側に造られた溝により切られ、5号住居跡は西側が欠失している為である。

1号、3号、5号の各住居跡はいずれもほぼ東にカマドを有している。

溝は、南北に走る、幅60cm、深さ20cmの小溝で4号住居跡の東部分を壊し、鉄塔下に至るものである。

調査区の北東部に火葬墓が1基検出されている。南北60cm、東西30cmの煙道を有する遺構で、年代を示す遺物（古銭、カワラケ等）の出土はないが多量の炭化材と骨片が検出されている。

土壇4基は、北壁のほぼ中央部に隣接し検出されている。

出土遺物

住居跡からの出土遺物は、土師器及び須恵器の杯、甕などが主に出土しているが、特に1号住居跡からは、須恵器の羽釜が出土している。

同遺跡が飯塚遺跡に近く、当初より同期の遺物の出土が予想されたが、今回の調査では鉄塔の東側部分に遺構の検出は確認されなかったが、僅かに弥生時代中期、須和田期の細片が検出されている。いずれも図示に耐えられないものであったが、注目すべきものと思われる。

覆土中より、土師器及び須恵器の小片がかなり採取できたが、遺構に伴うものは多くはない。

土壌中からは、特に顕著な出土する遺物は認められなかった。

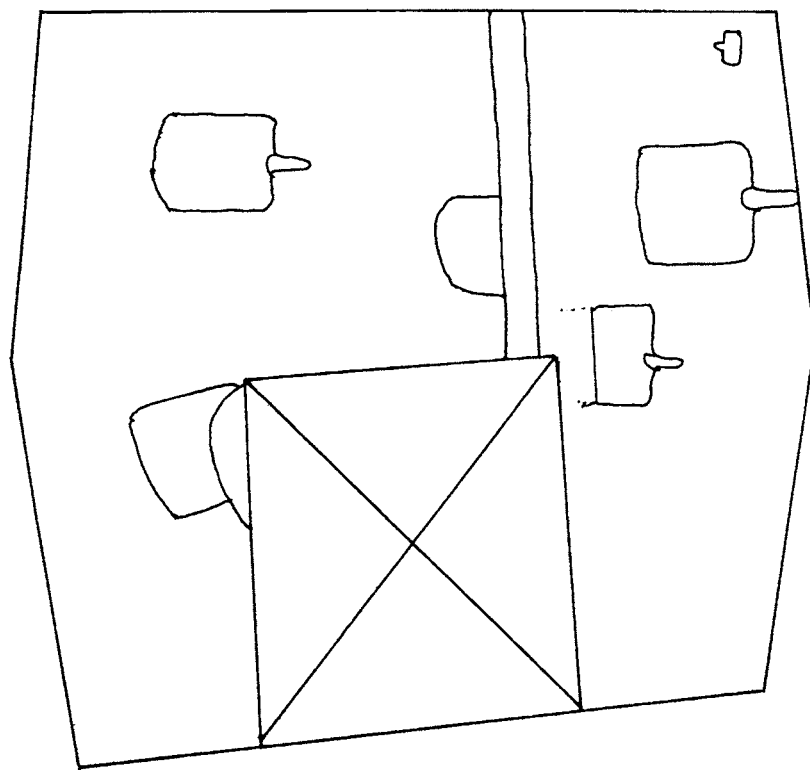


図 4 飯塚裏遺跡全測図

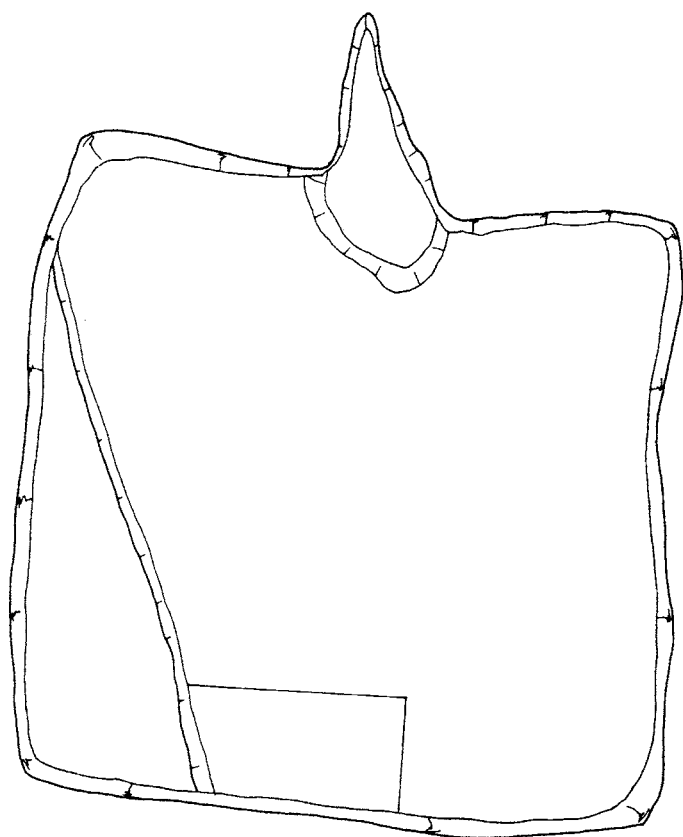


图 5 1号住居跡

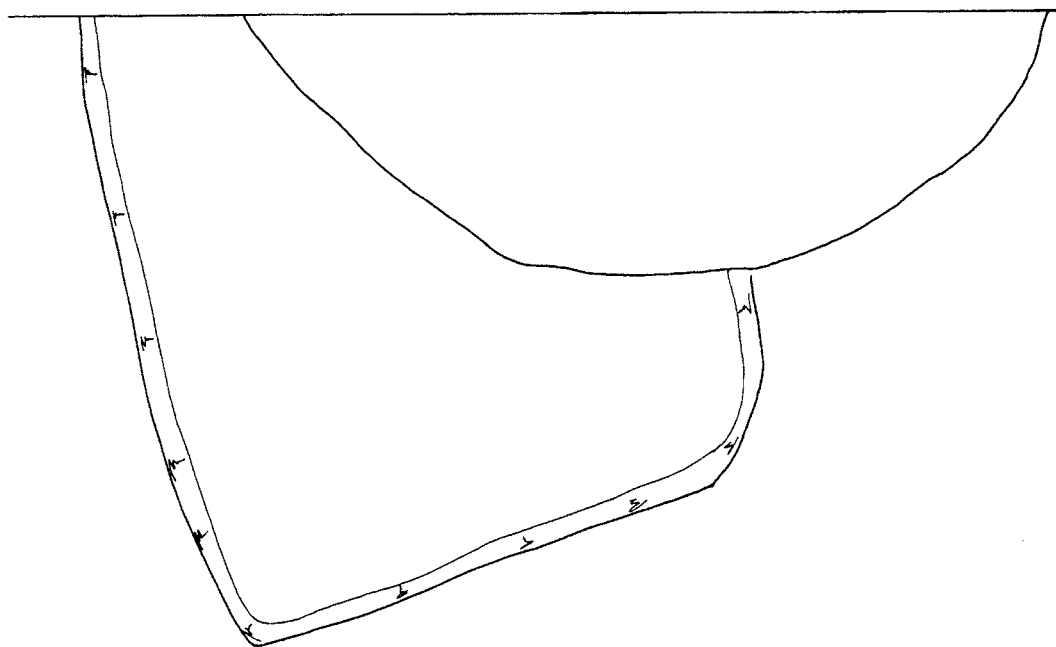


图 6 2号住居跡

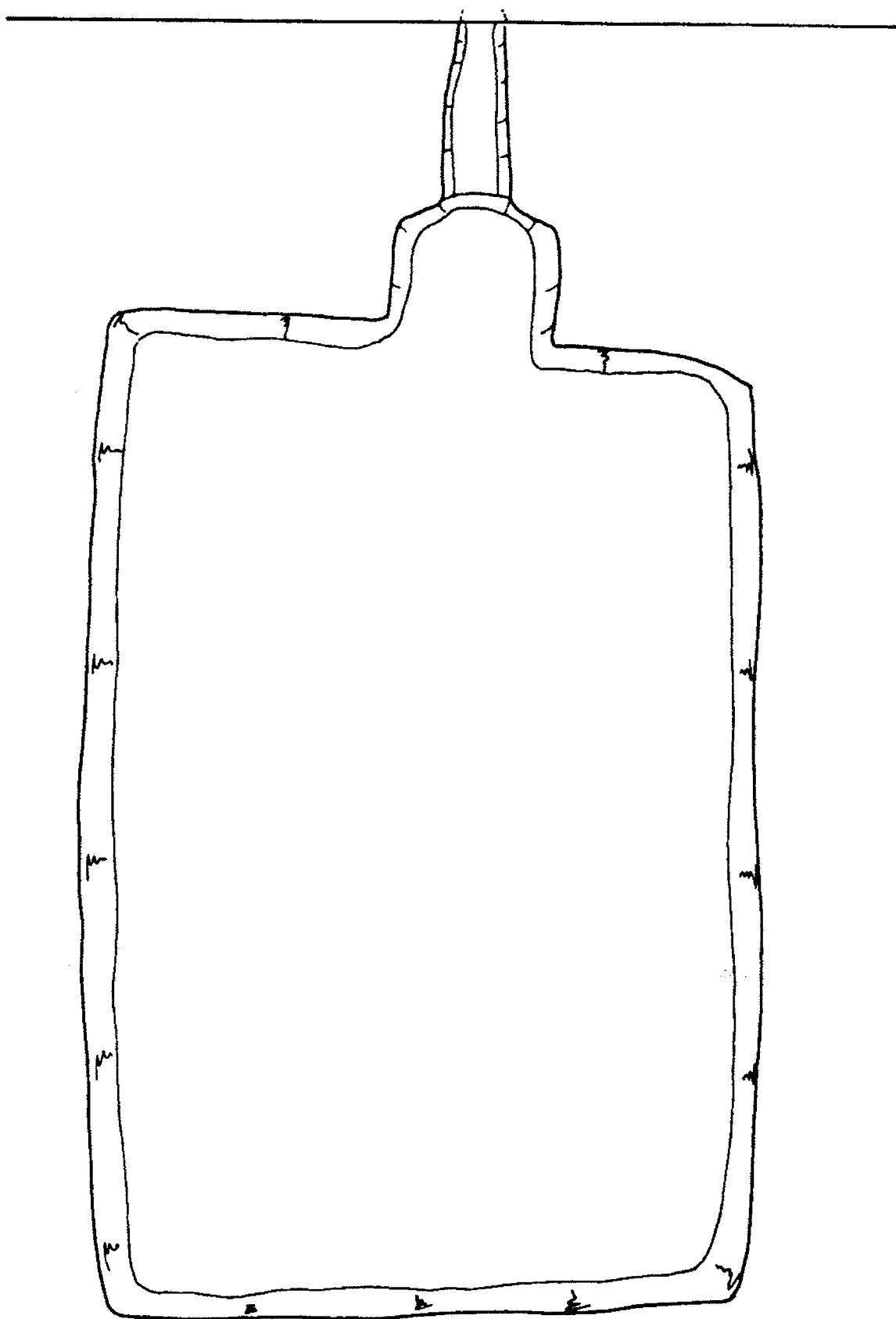


图 7 3号住居跡

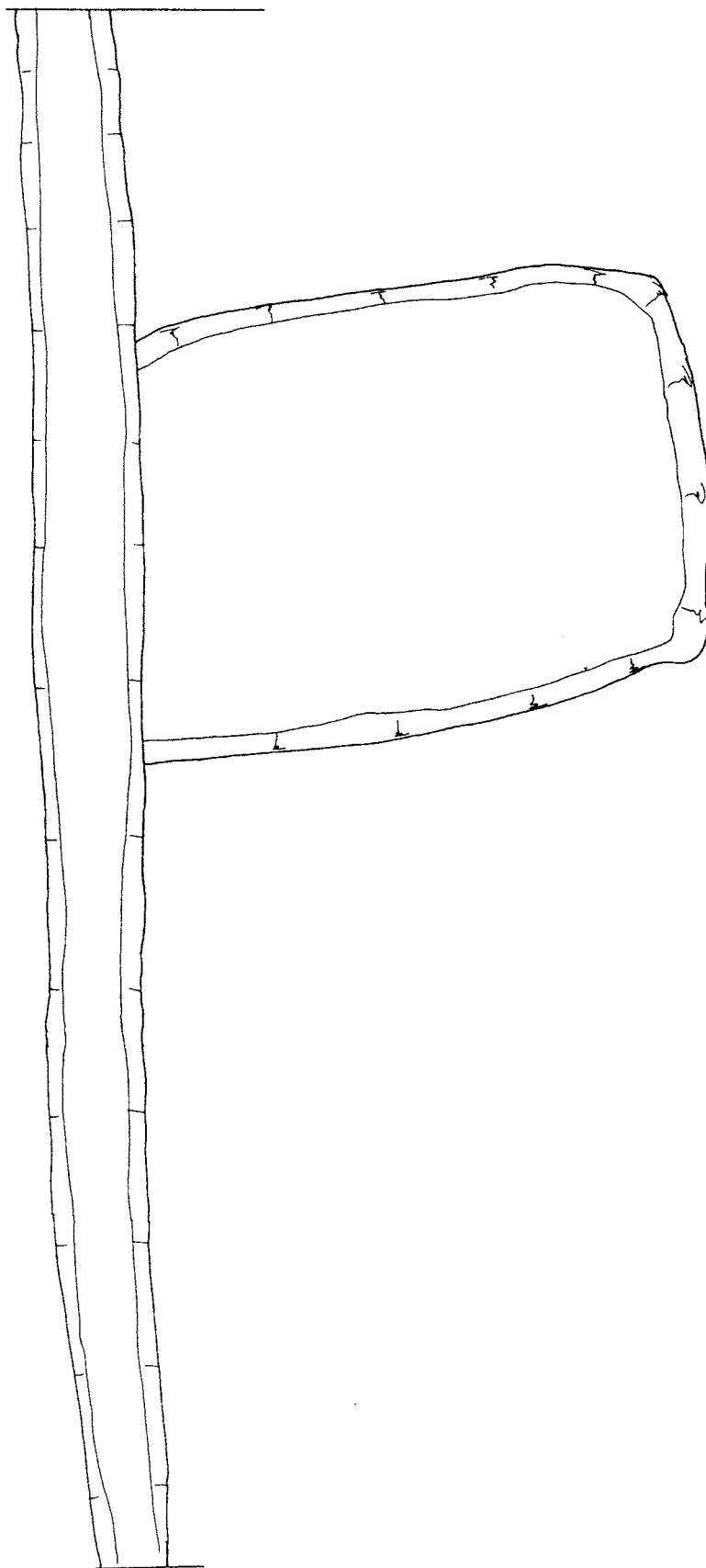


图 8 4号住居跡・溝

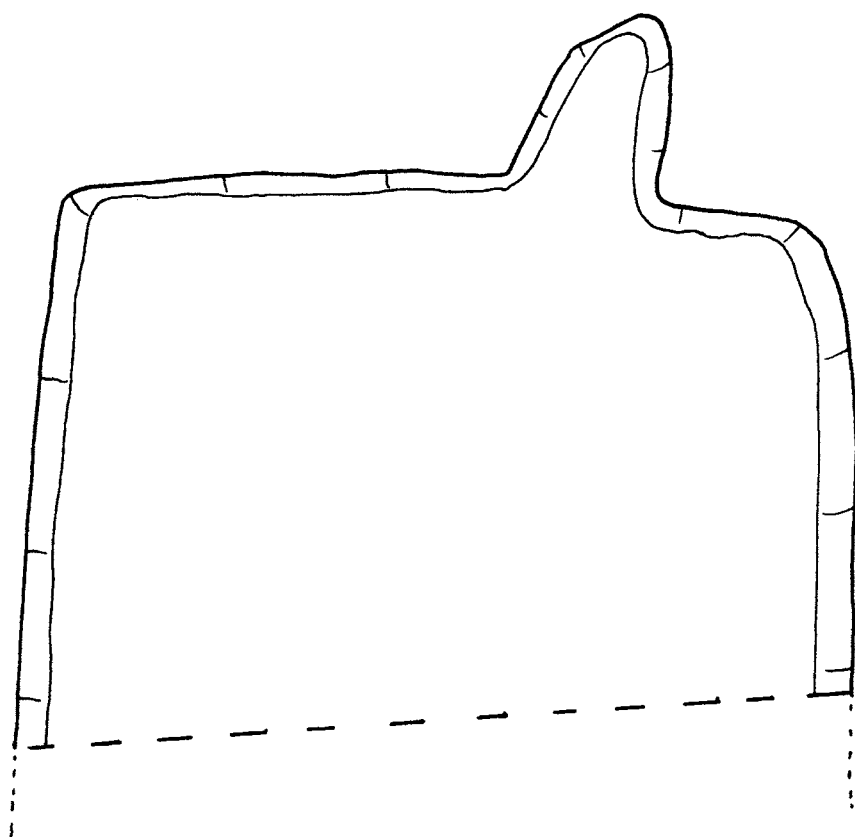


図 9 5号住居跡

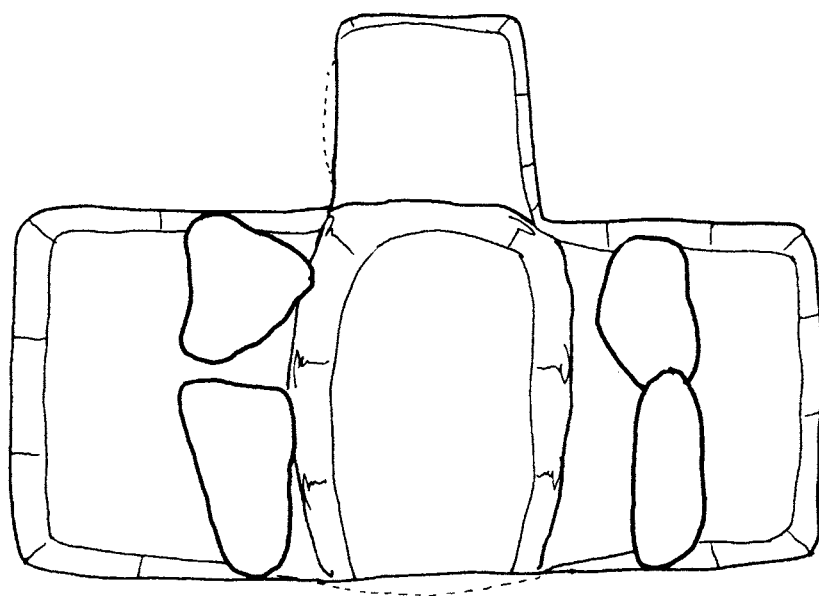


図 10 火葬墓

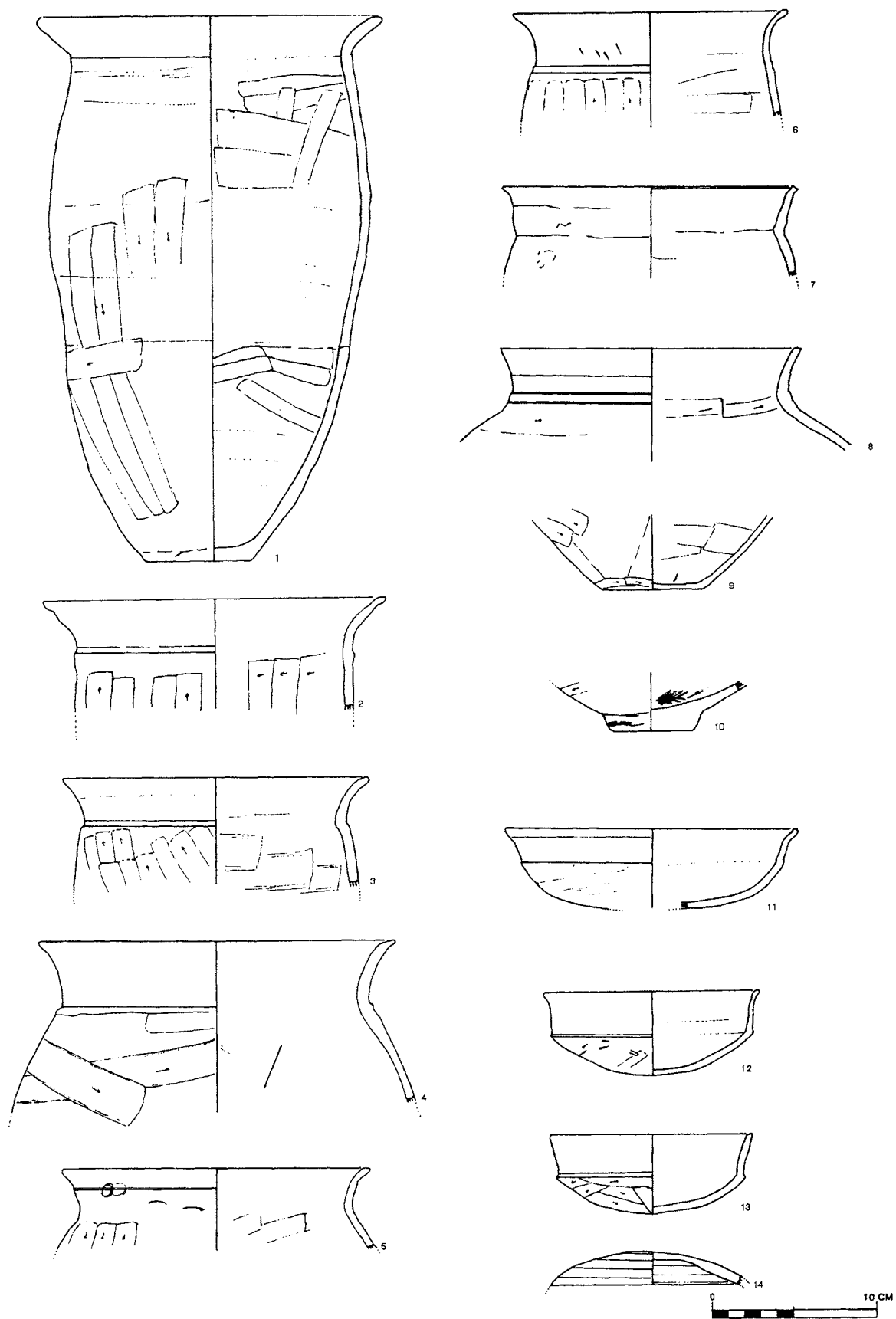


图 11 出土遺物

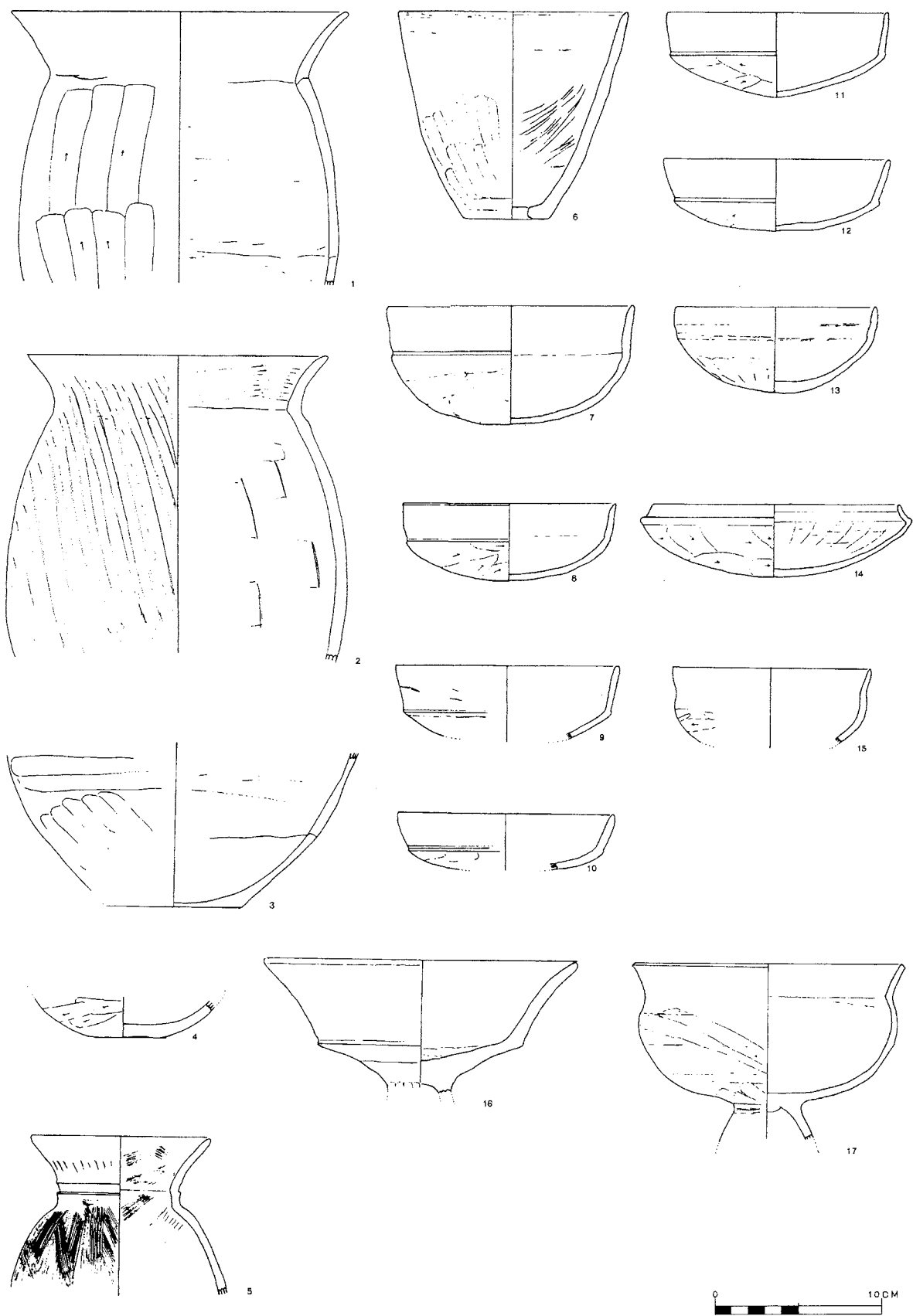


图 12 出土遺物

3 藤屋敷遺跡

妻沼町大字飯塚字藤屋敷 1 0 2 8 - 1 外

遺跡の概要

本遺跡は、既設鉄塔の東・北・西側部分の三面を調査したもので、従来は畑であったが土地改良事業により水田に転換されて居り、北側に残る畑部分に較べ約 1 m 程の高低差が現状で認められる。

地表面では比較的多くの土師器の細片が散布しており、表土の削平が著しく行われたものと思われる。

検出遺構

検出された遺構は、溝 1 条、敷石遺構 1、土壇 2 基である。

溝は、幅 5 0 c m 前後で深さ 3 0 c m ~ 4 0 c m の小溝で調査区の端部で土壇に接し欠出してしまふ。また幅約 1 0 c m の浅い直交する落ち込みが 4 条確認される。埋土の上面中より若干の土師器の細片検出されるが、混入による出土と推定され、本遺構の帰属年代については明確ではないが、覆土の状況から近世期のものと思われる。

敷石遺構と称した遺構は、調査区の西南隅に検出したもので、小礫（小砂利の方が適切か）が幅約 4 0 c m の拡がりで直線的に延びて、調査区外へ更に存在するものであろう。従前の道路の東側にほぼ平行の位置的關係が考えられる事から、あるいは道路状遺構の可能性も有る。年代は近世江戸期の所産と考えられる。

土壇は、先の溝と接するもののほかに、径 1 m × 0 . 7 m 程の楕円形を呈し、深さ 4 0 c m 程のものが検出されている。

出土遺物

表土上の遺物の散布に比して、調査時の遺物の出土は少ない。土壇中より須恵器の小片が検出されている程度である。

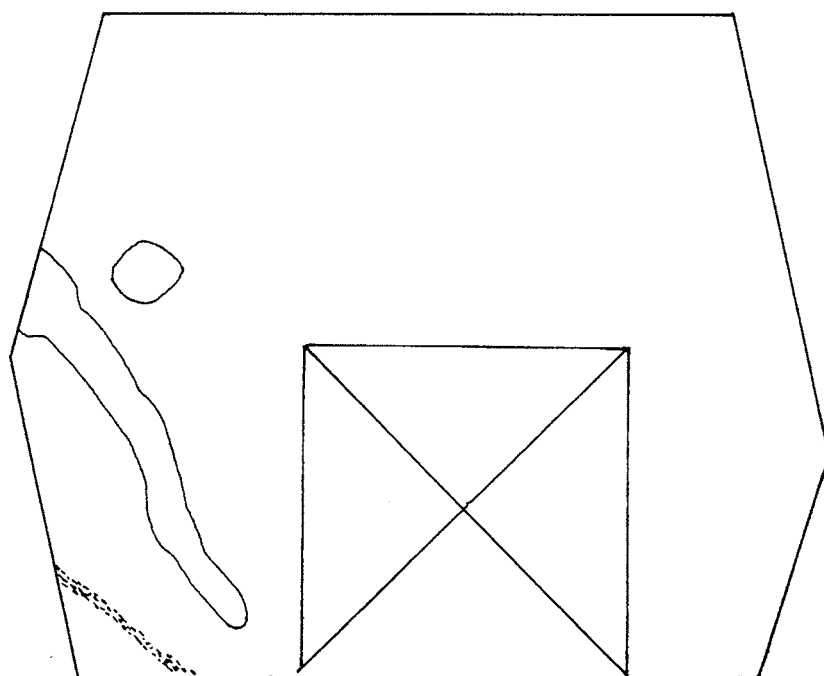


図 13 藤屋敷遺跡全測図

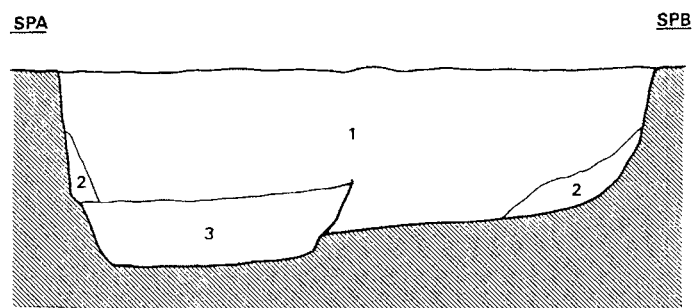
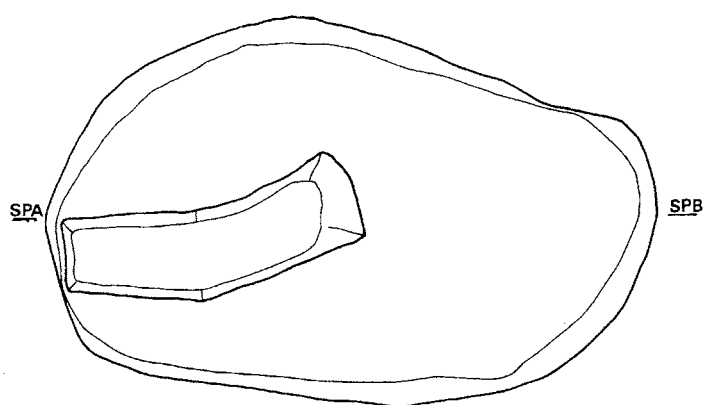


図 14 1号土坑



图 15 敷石遺構・溝

4 中原遺跡

妻沼町大字飯塚字中原 1 1 3 5 外

遺跡の概要

本遺跡も土地改良事業の実施された区域に該当する。更に戦前において、近隣の瓦製造用粘土の採掘場として、表土の相当部分が削平され、極めて保存状態が悪い。

既設鉄塔のほぼ北側部分が調査対象になり、水田として利用されていた。

検出遺構

検出された遺構は、長楕円形の土壌状の落ち込みが検出されたにすぎない。伴出遺物もなく、性格は判然としない。

出土遺物

特になし。

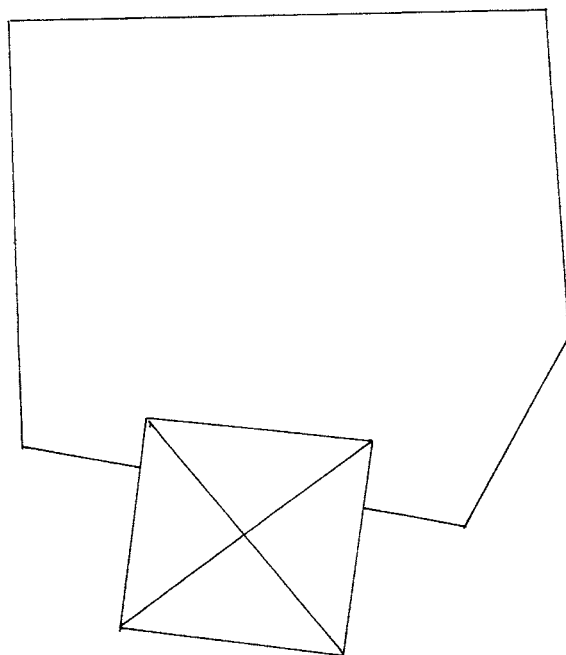


図 16 中原遺跡全測図

5 八幡木遺跡

妻沼町大字飯塚字八幡木1807外

遺跡の概要

本遺跡は、調査区域東に生活用道路が通り、他の4カ所に比べやや変則的な調査区域となっている。既設鉄塔の西と北の逆L字状と道を挟んだ東側の一部を調査した。地目は、東と北が牧草地、西が水田となっている。

検出遺構

妻沼町誌によれば、当該遺跡よりかつて埴輪が出土したとの記述があったが、今回の調査では、平安時代の住居跡1軒、中世の溝1条、近世（江戸～近年）の用水路を検出することが出来た。

住居跡は、上面の殆どが削平されており、北側は溝により欠出している。辛うじて東にカマドを有しているが、保存状態は悪い。床面より遺物が若干出土しており、平安時代の範疇の住居跡であろう。

溝は、この住居跡の北壁部分を壊しつくられたものではほぼ東西に直線的に延びており、東は鉄塔下に入り、西は調査区域外へと延びている。幅約70cm程で、住居跡同様上面は削平されており、深さは、20cm程しか残存していない。

他の溝は、調査区の西南コーナー部で検出されたもので、東側は人頭大の河原石で、石垣状に4段ないし5段にわたり積み上げ、西側は板材を横に渡し、丸太で押さえた状況で確認された。この遺構は戦前地域の住民により、用水路の補強として行われたもので、用水は、古くから（江戸時代後期か）近隣の灌漑用水として機能しており、流入した土砂の排除や、補強整備の為の小工事がたびたび行われており、重要な生活用水として利用されていたものである。

出土遺物

住居跡からは、土師器と須恵器の小片が出土している。この住居跡の北側に接する溝中からも少量のかけらが出土している。

用水路からは、特に顕著な遺物の出土はない。

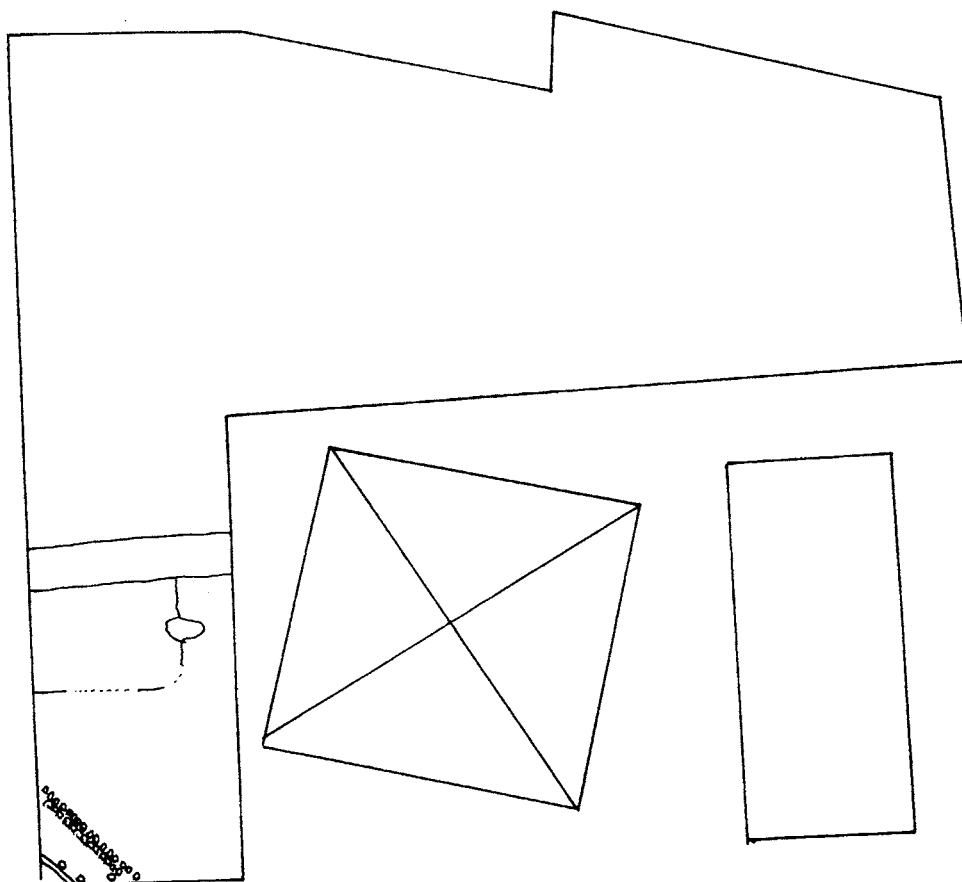


図 17 八幡木遺跡全測図

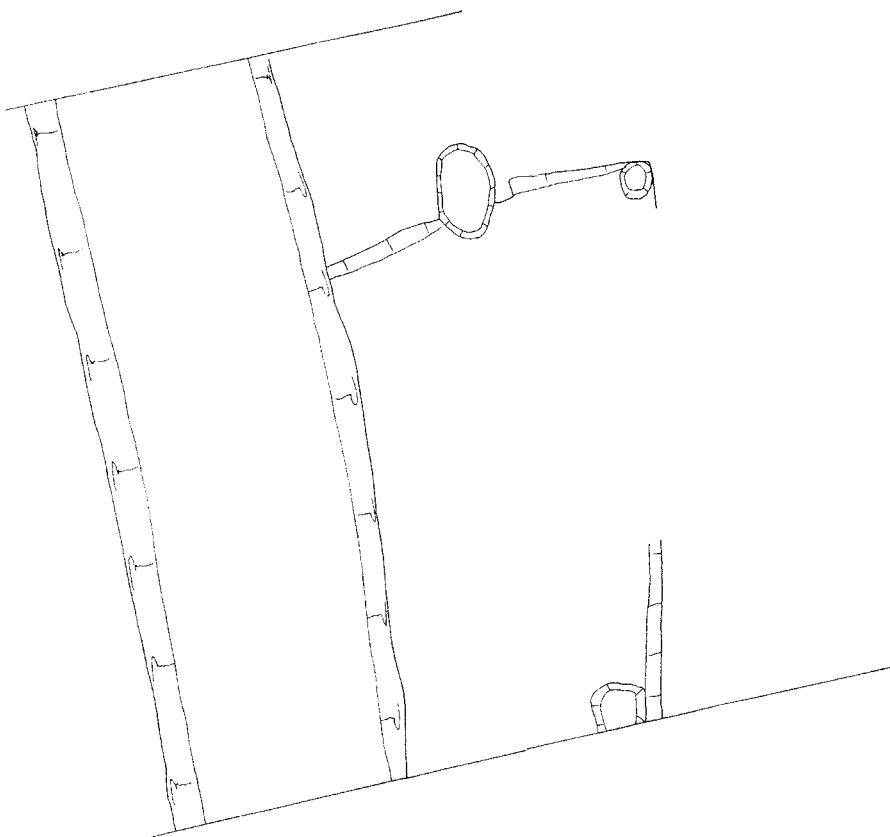


图 18 住居跡・溝

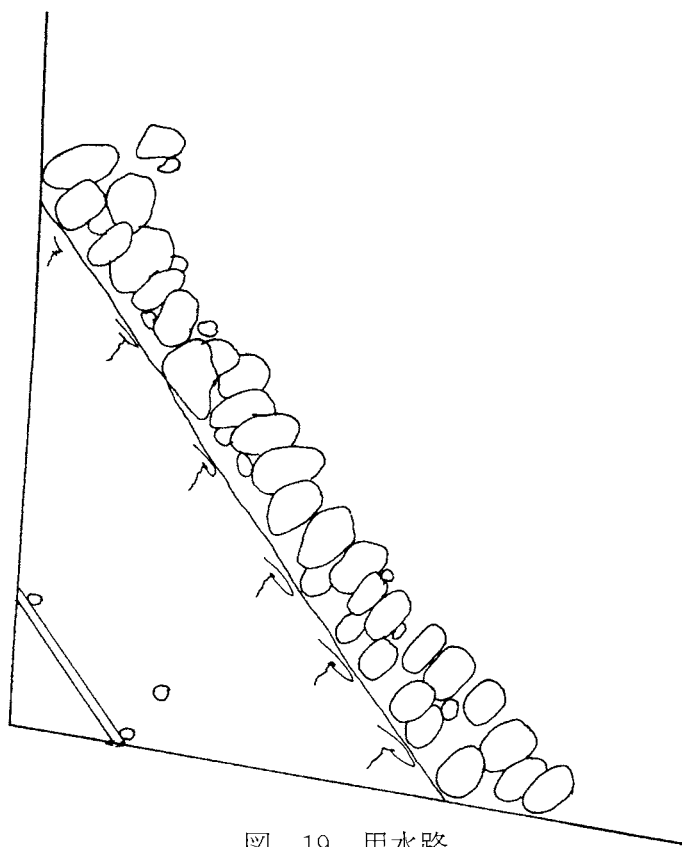


图 19 用水路

Ⅳ. まとめ

当該遺跡群の発掘調査は、鉄塔敷地内という条件の下、当初の設置時に於ける工事内容や、その後の土地改良事業に伴う、削平等が実施された地域である事より、調査開始前より遺構の保存状況について、余り良好ではないであろうと危惧されたが概ねその通りであった。表土の遺物散布状況に比べ、遺構、遺物共乏しくかなり消失したと推定される結果であったが、そんな中でも幾つかの新知見をもたらす成果が得られた。

こうした、状況下の中でも殊に、飯塚裏遺跡においては比較的良好な状態が保たれており、多くの遺構の検出をすることができた。同遺跡は覆土が厚く堆積しており、5軒の住居跡が確認されたが、狭小な調査面積に比べ濃密な分布状況を示しており、周辺部の現況を付加するとかなり広範囲に遺物が散布しており、大規模集落遺跡の存在が予想される。

更に、当該遺跡の東方約70mに飯塚遺跡があり、今回の調査においても若干ではあるが、同時代の遺物が検出されて、弥生時代中期の良好な遺跡の可能性の期待を抱かせるものであった。

また、1基検出された火葬墓は近年その調査例が増加しているが、町内でも弥藤吾新田遺跡で隣接した2基が調査されている。明確な時代を示す伴出遺物こそ出土していないが近世江戸期のものと推定される遺構であり、当時の葬制は寺院内もしくは共同墓地内に埋葬される事が通例と考えられる。火葬墓の検出例は多くが、集落から離れた場所より検出されており、単独もしくは数基が造られている。尚且つ火葬という当時としては極めて特殊な葬送形態と、集落から隔離され墓標を伴わずに、いつしか忘れ去られる様な特殊な葬送儀礼の要因は、ある種の特別な疾病等に遭遇した事による埋葬形態と推定される。

写真図版

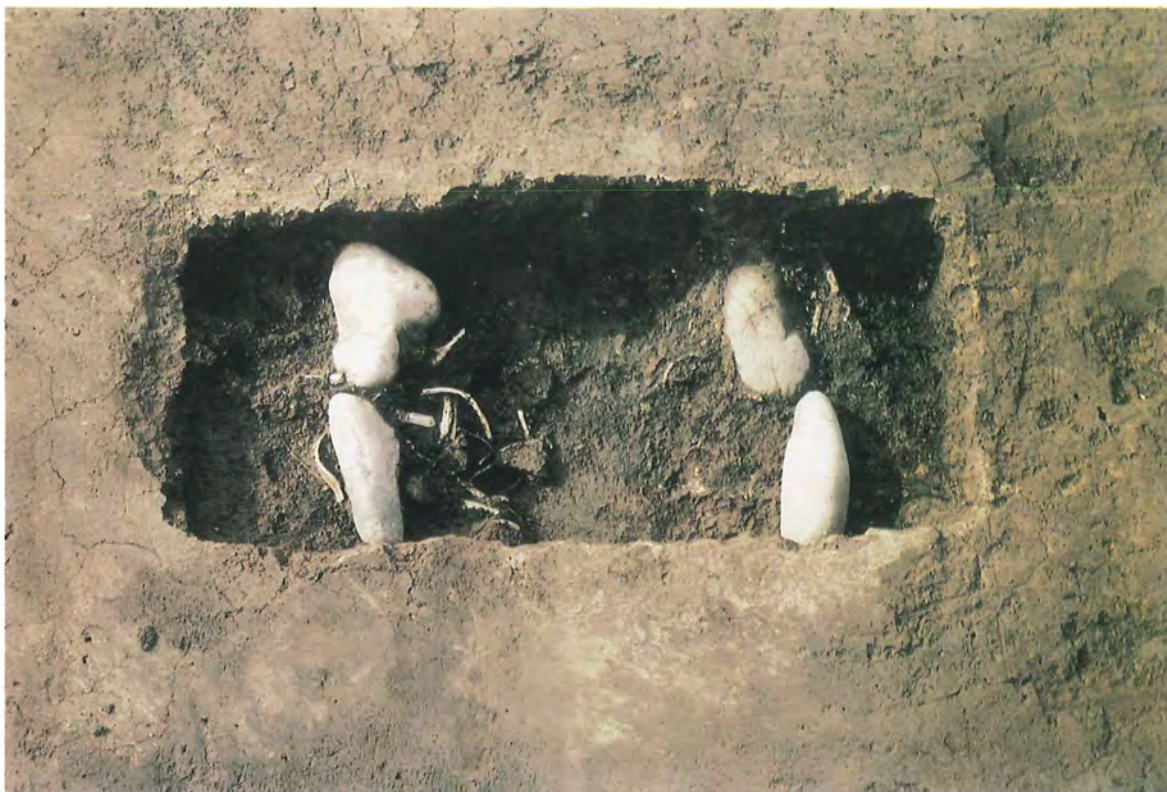
版元発行部数1、出



沼ノ上遺跡作業風景



飯塚裏遺跡全景



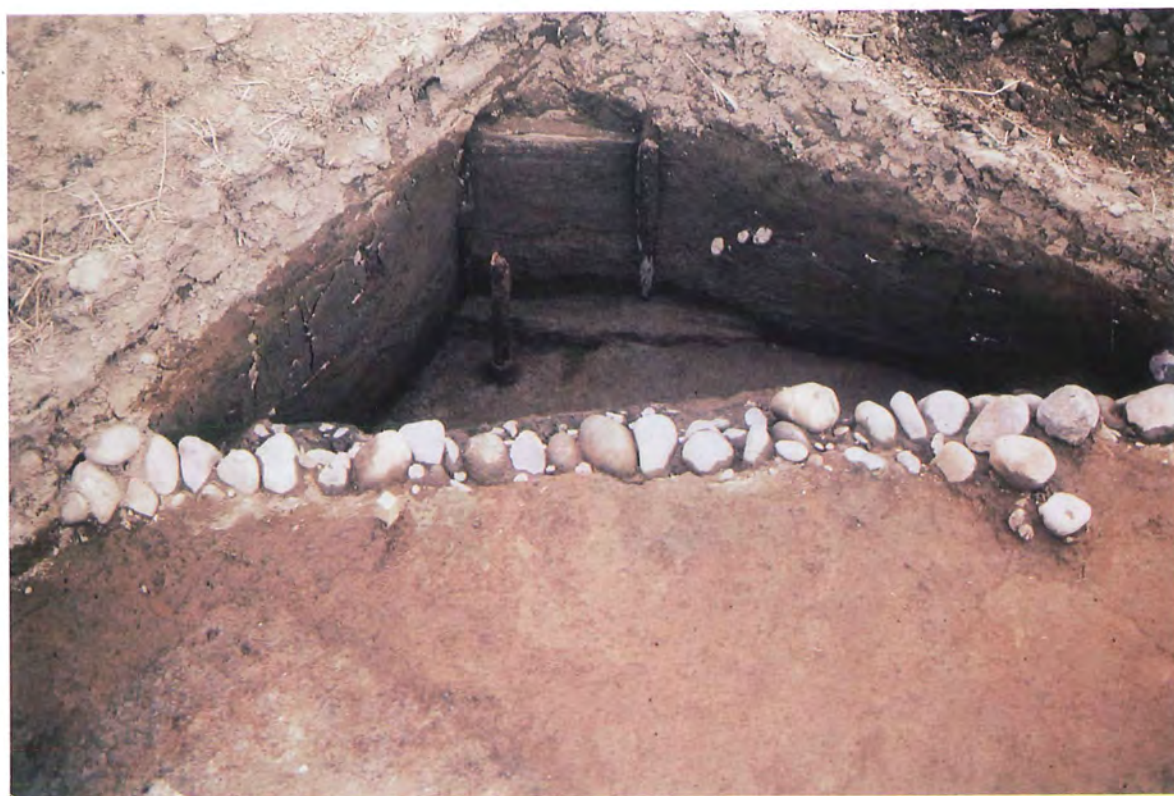
同火葬墓



同 上



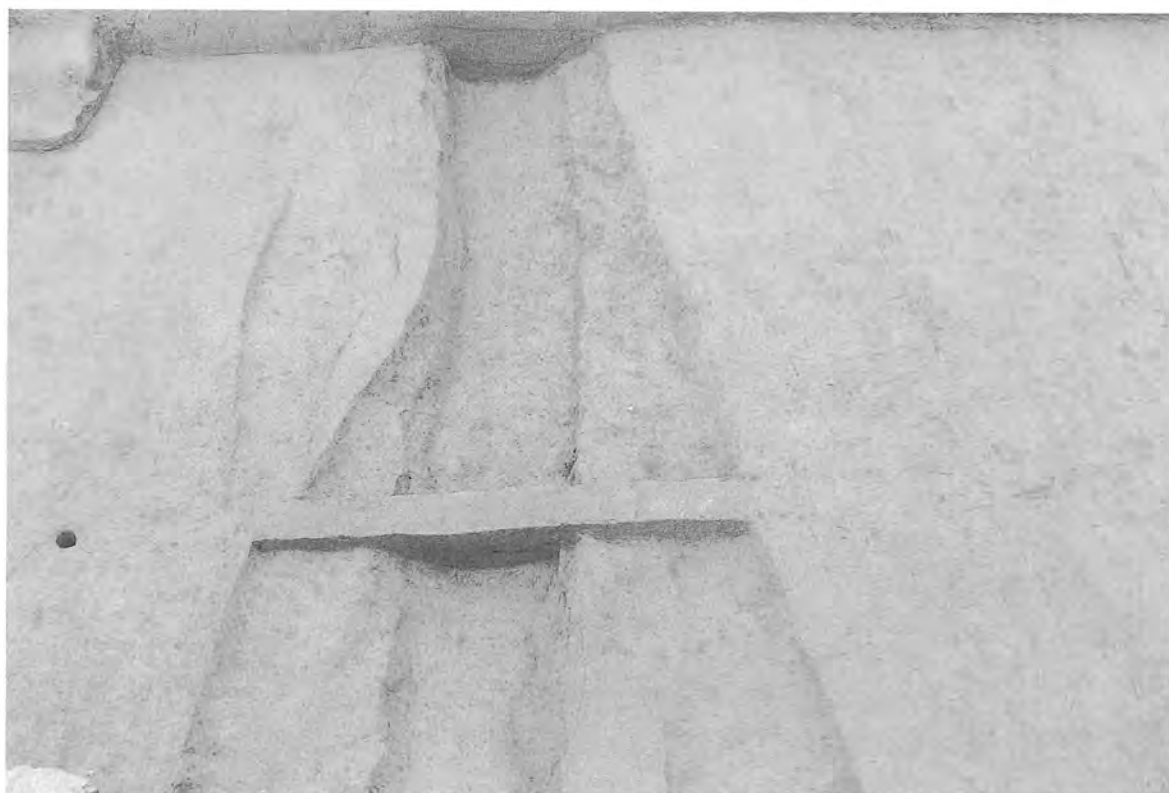
藤屋敷遺跡全景



八幡木遺跡用水路



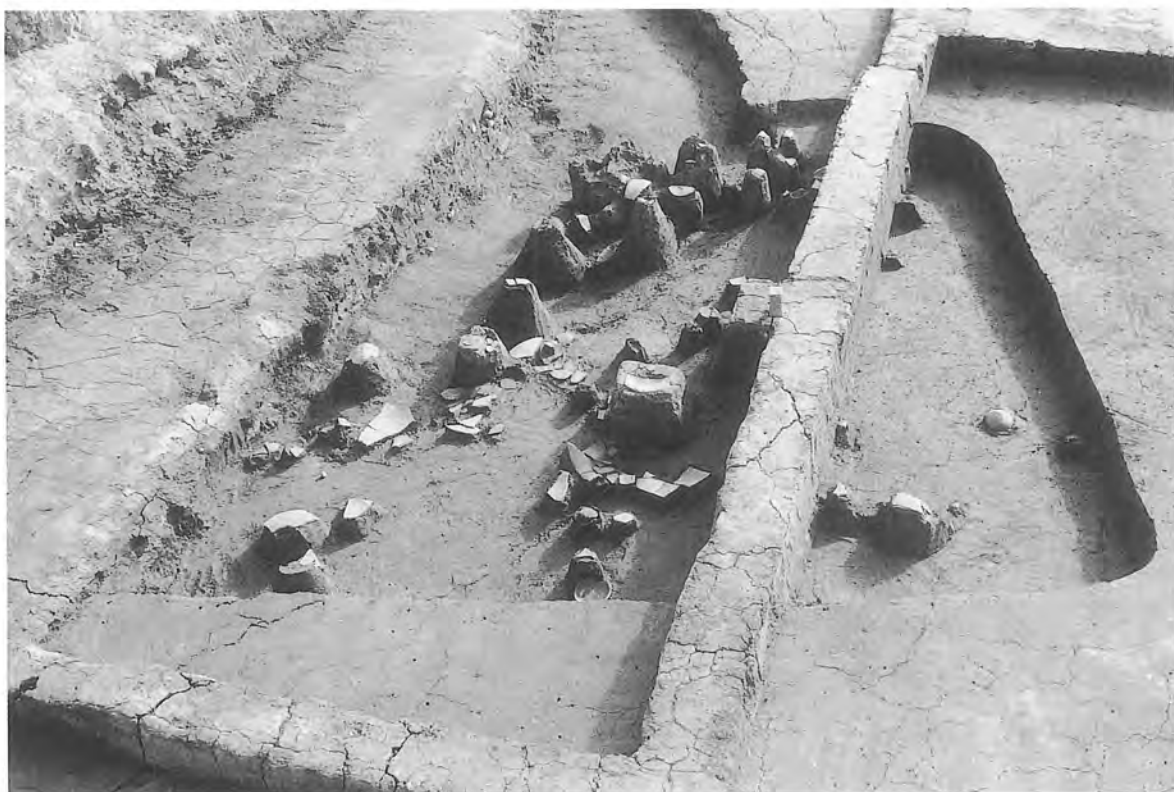
沼ノ上遺跡作業風景



沼ノ上遺跡溝状遺構



飯塚裏遺跡 1 号住居跡



同 2 号住居跡



同 2 号住居跡



同 3 号住居跡



同火葬墓



同作業風景



同全景



藤屋敷遺跡



同溝状遺構



同敷石遺構

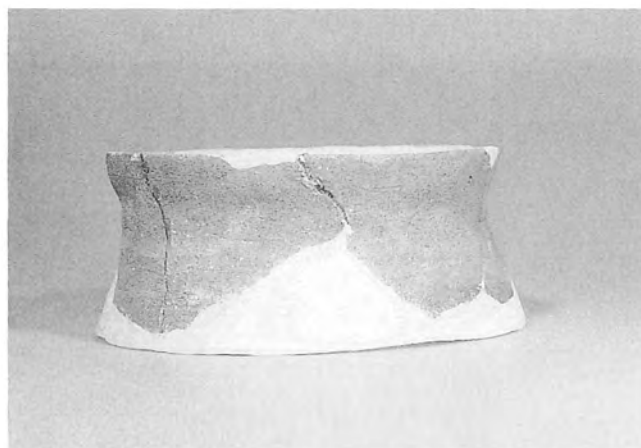
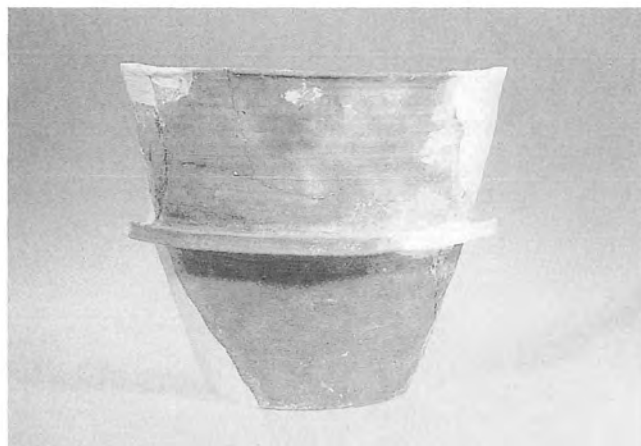


八幡木遺跡用水路

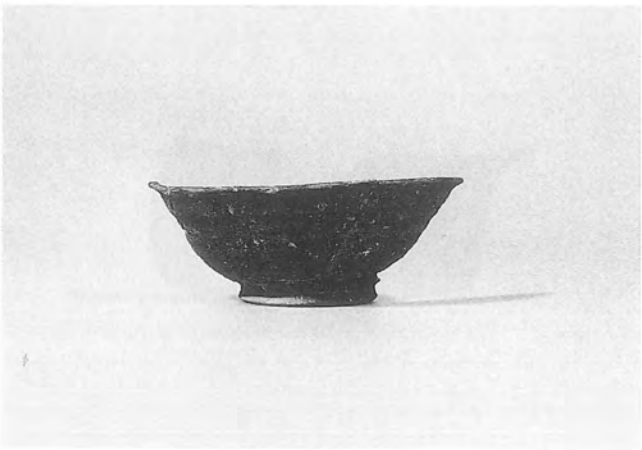
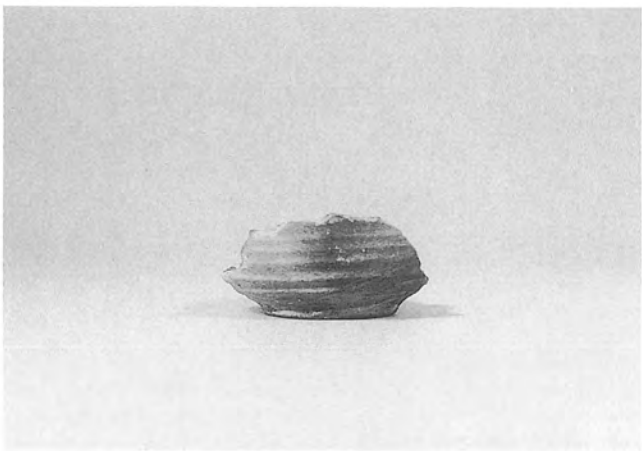
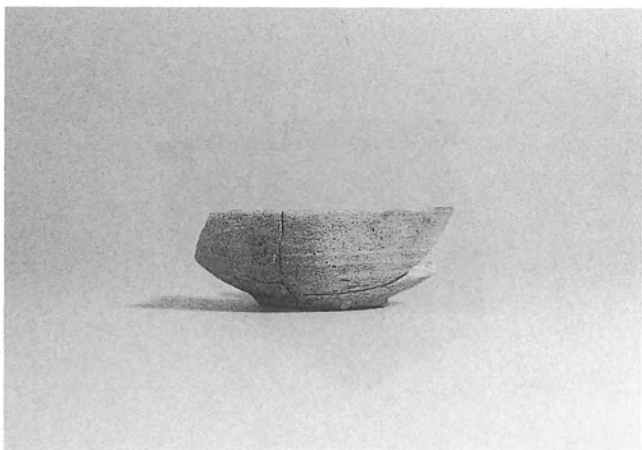
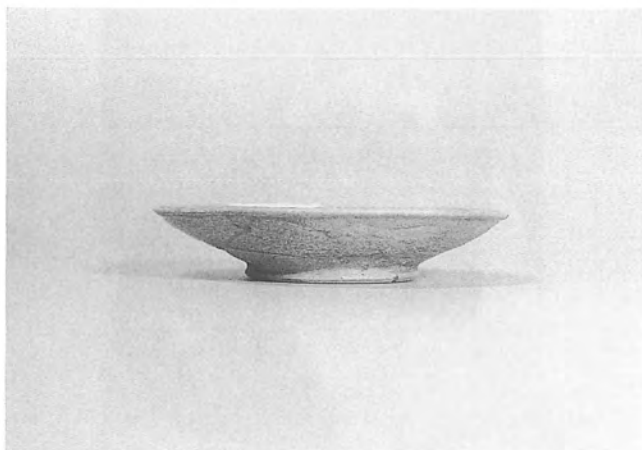


同住居跡・溝

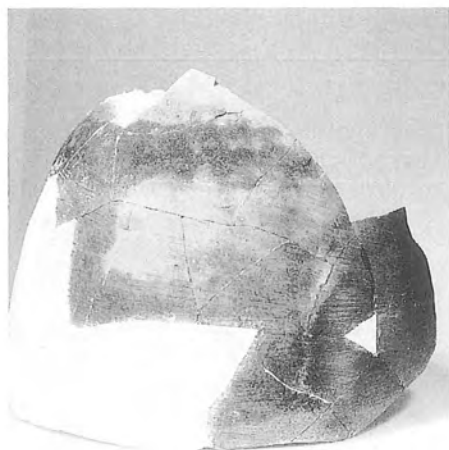
飯塚裏遺跡出土品(1)



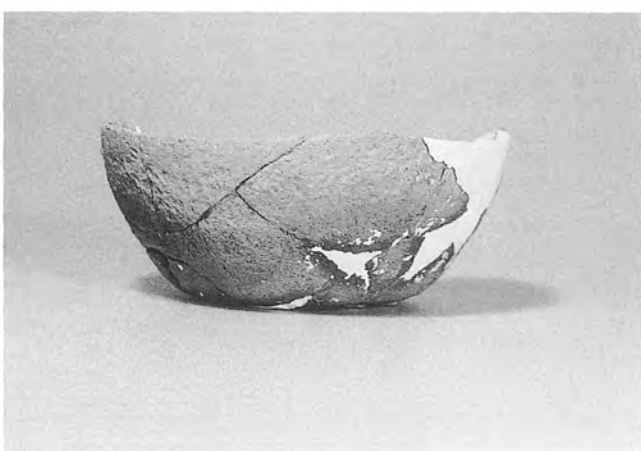
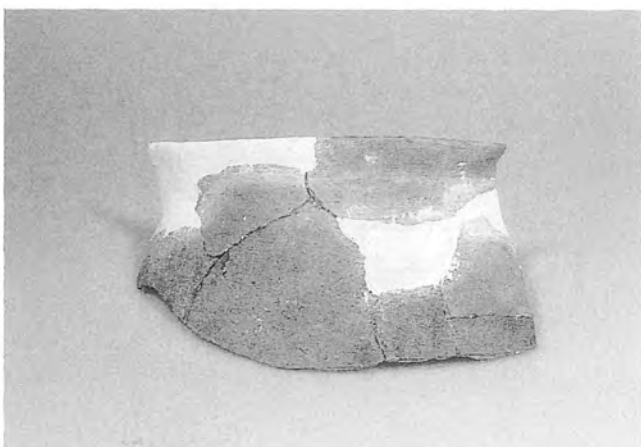
飯塚裏遺跡出土品(2)



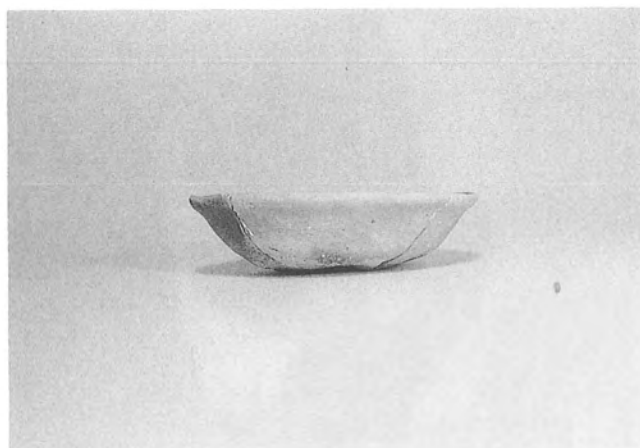
飯塚裏遺跡出土品(3)



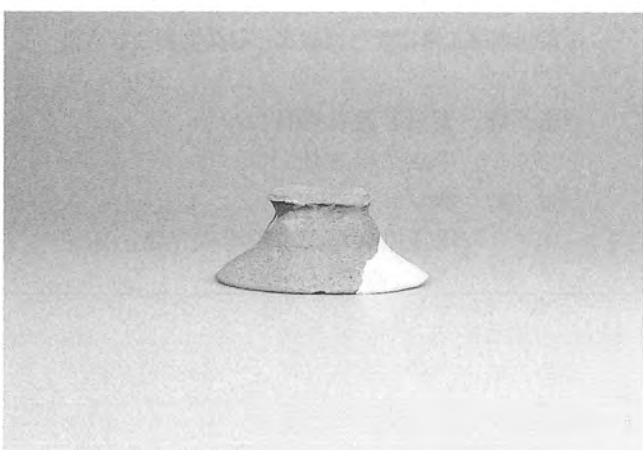
飯塚裏遺跡出土品(4)



飯塚裏遺跡出土品(5)



飯塚裏遺跡出土品(6)



沼ノ上・飯塚裏・藤屋敷・中原・八幡木

— 送電線増強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発 行 妻沼町教育委員会
平成7年3月

印 刷 (株)ショーシン
埼玉県大里郡妻沼町大字妻沼1250